

佐伯氏が大友幕下の雄將であつたこと及びよく知られて
いる。しかし富強を懐視されて、十代惟治は大友義隆に
攻められて、尾高智に憤死し、十二代惟教は予州に難を
避けて、久しく匿居することを余儀なくされている。

毛利氏は二万石の小大名ながら、其の内政は裕福であ
つた。これ日鶴屋城の遺構や毛利家の墓地を見てどうか
がえるし、又温故知新録による、文化元年の江戸参家中
総人数三百九十一人から考えてもう文づけることである。
此の佐伯富強のよつて来たる所は何であるか、土地
はよく開拓されて、海岸部で及耕して天に至る風景も見
られるわけであるが、山多く、平地の少ない土地、二
万石の年貢上納は震氏にとっては重い負担であつた。余
裕はごひから生まれたが、それは海へ幸からであつた。
全く佐伯の殿様浦で持つてゐる。津久見から波当津に
至る長い海岸線と出入りの多い地形は、豊富な漁場を開
拓させて、九十九浦をうるおし、佐伯藩をうるおし、二
万石をほるかに超える経済力を与えたものである。事件
の陰に女あり、は実解明のみとつこのポイントであるが
より以上に史実の背景となり基盤となる経済力との関連
に留意することが、我々の御土史研究にも要請されるお
けである。

随想

李鴻章の湯呑茶碗

賛助会員 高橋 智

私はへたの横好きと云うか、書画骨董から刀剣、仏像
に至るまで、凡そ美術品と名のつくものは、何でも好き
である。そんなわけで、佐伯市近郷では、誰がどんな物
をもっているかを知りたい。

である。そんなわけで佐伯市近郷では、誰がどんな物を
持っているかを知りたい。又実録に頼って
方も多い。

この話はもうかれこれ六七年前になるが、味生町
白山でボタン作りで有名な、もう故人になつた矢野武彦
さん方を訪ね、書画を見せられたときのことである。
ちやうど床の間は、屏の赤絵の小さな壺が置かれてあつた
ので、その壺と譲つてくれたのかと頼んだところ、貴分
はこんな機物にも興味があるのかと云うので、実は書画
よりも機物の方が好きであると答えると、それなら珍ら
しい物があると云つて話してくれたのが、李鴻章の湯呑
茶碗の落である。

李鴻章は誰でも知つてゐる通り、清朝末期の首相級の
政治家で、明治二十七八年日清戦争の際日本軍が大勝利
を納め、日本からは伊藤博文が特命全權大使となり、中
國側からは李鴻章が大使として来朝し、下関の春帆楼で
講和談判が開かれた。

この春帆楼は、それ以来料亭として旅館として有名な
なり、安徳天皇と祀る赤間宮や、長舟の万木帝と共に、
観光名所の一つとなつてゐる。

私は大正十三年、小学校六年の修学旅行で、海舟出身
の笠井豊先生に引率されて、この料亭を見学したことが
ある。二階大広間はなんでも六十畳敷位はあり、伊藤博
文の扁額があつたことを覚えてゐる。この大広間で講和
会議が行われたと云つてゐる。

又その当時の料亭のおかみは、佐伯出身の人であつた
とか、そんな縁故かどうか知らないが、当時たまに佐
伯方面からこの料亭の下働きに働かれていた男の人がい
た。

ある日講和会議がすんで、会場の後がたづけの掃除を

する際、李鴻章が掛けていたテーブルの上には、茶碗が置かれたままになっていた。その男はそれがよほど致しかつたと思えてその茶碗を失敬し、二階の窓から裏の築山のある泉水に投げこんで、何くおぬれをしていったという。

ところが、その茶碗が無くなっていくことが後で判り、大変なさわざとなり、警察のせんざくを受けようというところが、結局はちからずじまいに終わった。

当時日本、中国要人警備のため、警部補と長とする十数名の警察官が泊りこんでいたというところであるが、その警備補は、李鴻章愛用の茶碗一個紛失の責めに責任をとらされ、何寺かの処分を受けたと云われる。

(以下ハ、ページ上段下)

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

—— 主として水枝の流通について ——

佐伯豊南高等学校教諭

同校郷土誌クラブ顧問

学生会員

市野頭

仁

第三節 佐伯港と木材

一 佐伯港における水枝の位置

さきにも、第二節「その社会的環境」の箇所でも示した佐伯港の輸移出入品目及額によつて、略、港の性格がつかめる。また大分、佐賀、津久見港等と比較した図によ

つて全果的な位置も分る。四十六年の四月六日、新装をつた海軍官庁舎の税関室を訪れて、税関長と二時間程話す機会を得た。其の時にいただいた資料を見て、佐伯港における水枝の位置をさぐつて見ることにした。

イ 佐伯港外国貿易概要

(単位 百万円)

年	輸出入	
	輸出	輸入
昭和四十二年	二、五五二	二、三三五
昭和四十三年	二、〇九六	四、九八三
昭和四十四年	二、五七一	七、九五七
昭和四十五年	三、二四六	九、七六一
合計	七、〇七九	一〇、〇二八

ロ 外国貿易船入港実績

年	日本船		外国船	
	隻数	噸数	隻数	噸数
昭和四十二年	一五五	一〇一	一三	一三
昭和四十三年	一五五	一八二	一八	一八
昭和四十四年	一四〇	一八〇	一三	一三
昭和四十五年	一八〇	一八〇	一三	一三
合計	五三〇	五三〇	五三	五三

(統計上噸数単位千トン、()内日枝水枝)

ハ 主要輸出品

品名	昭和四十二年		昭和四十三年		昭和四十四年		昭和四十五年		主要
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	
合板	六〇四	九七	六四八	一一〇	七四	一一	六〇	六〇	主要
セメント	一七、七〇八	三七、七〇八	二二、三三三	三三、三三三	一六七	二二	二二	二二	琉球
船舶	一八三	二〇、六	二六六	一六五	三三三	三三三	二二	二二	琉球
水枝	六〇八	一四							琉球

たのであろうかと、私は強い興味と感激をおぼえたのである。

私は木材業と造船所が、佐伯南郷地区の歴史的地理的風土に根ざした主要産業であることを、三年間の調査研究で知ることができた。

御上の若昔に夢を持ちたいせる意味からも、佐伯市の表裏開である佐伯港の調査は、思いきり大規模なものにするべく、県当局にその熱意のほどを強力に、政治化することをおもう。県南に県政の施策が手薄であるとの批難が当を得ておるとするならば、一層のこと市民のバツプアツプがなければならぬ。

豊田川の市谷、柏江港と、番匠川の土器屋港から横出されたおが佐伯木炭は、大坂港目指して出帆した。以来一世に足らずして、東九州の中ほどに位置する佐伯港は出入する木材及び木製品、鉄鋼船、世界の海に雄飛する国産港となつたことを、おらためて自覚しなくてはならない時代が来たと思う。

(おわり)

(三ページ上段二行目よりつづく)

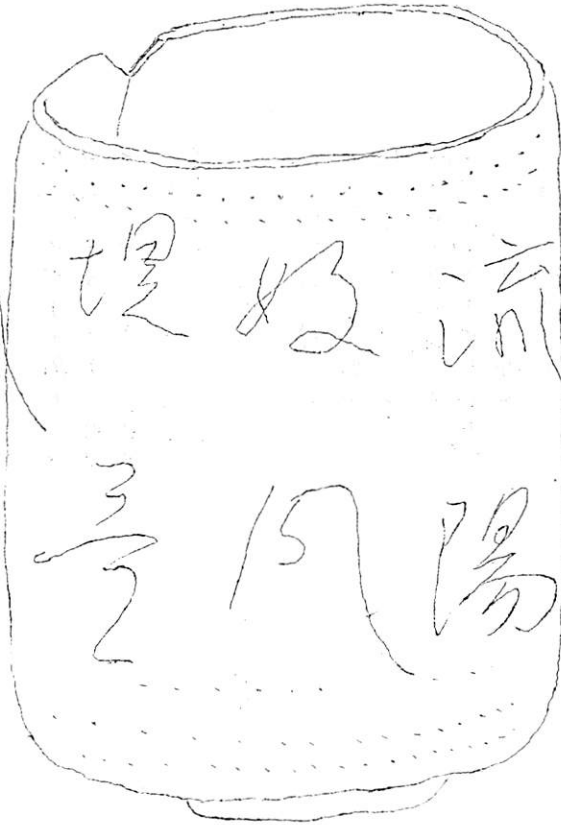
李鴻章の茶碗のつづき

その茶碗がどうして矢野義彦氏の手にはいったか、そのいきさつは潮がなかつたが、矢野氏はその茶碗を持つてゐる人がどうも気がとがめて、もう随分前に盛田新助氏(当時県議、土建業)に只であげたので、また持つてゐるかも知れないというのであつた。

私も盛田新助氏とは前から懇意の間柄であつたので、何かの用事で盛田氏を訪問した際、話のついでに李鴻章の茶碗があるなら見せて頂きたいと頼んだところ、奥さんがすぐ持つて来て見せてくれた。そしてこんな話をな

い茶碗のどこに見どころがあるかわからないが、飲まければ只であげると云うので貰つて帰り、現在秘蔵してゐる。

この茶碗は、高さ九、二センチ、口径八、三センチの筒茶碗で、内側は薄青味を帯び、灰色グスリのヒビ焼、外側はこげ茶色に小さな楕円のギザギザが一面にあり、その上に乳白くすりぞ、字が七字と落款がある。大体こんな格好である。



清奴堤

陽月

何と書いてあるのか、サツパリ読めないが、すごく達筆である。

この焼物は磁気でなく陶器である。中国、朝鮮、内地いづれの焼物かわからないが、どう見ても骨董価値のあるような品物とは思われないし、又清朝の政治家が日本に来るのに、おぼろぎ湯衣を持参するだろか。おそれなくそんなことは考えられないので、この茶碗は春帆楼の乗客用に使用した、ありふれた茶碗をろうか。然し未客用にすれば形が大き過ぎるきらいがあり、やはりどこの家庭でも個人用に使うものとして考えられない。そうすると李鴻章が下痢の陶磁店はどこかで、ありふれた湯衣を買って、個人用に使っていたのかも知れない。

この茶碗にはキズがあり、口が欠け、ヒビがほいてある。このきづは二階から泉水に投げた時のきづと云われている。それが陶器類の修理のうまい人に頼んで修繕したら、少しは楽しめる物になるのではないかと思っている。

(李正村文化調査委員、本正村三股)

追悼詩

嗚呼、立川輝信先生

羽柴弘

去る七月二十三日夕刻、大分探勝アルコウ会より、立川先生急逝、二十五日御葬儀に、高木会長と共に参列す、帯来感ありて。

大分の空に 高だか、

師と仰ぎ 慕い望みし、

又会友として親しみし、

巨いなる星、

音もなく 影を失ふ。

群星の中に交りて、
アルコウ会という独自の道を、
八十のよばひも忘れ、
ひたまきは歩ける姿、

嗚呼、立川先生 今日亡し、

左とへれは夏の夜空の、
南天の星座 さそり座、
その先登 一きはさやか、
またたきつつ赤く輝き、
群星をひきいてめぐる、

嗚呼 アンタールに似たるかな、

或る時は尺間嶺を小き、
海山の勝れたる景観、
眼をぬぐひ賞でてながめし、
或る時は瀬戸浦を歩き、

最勝の海藻ささげし古事語り、
つい先の日は、御希望の堅田路に、

豊薩の古戦場を歩らひ、
手に杖し、歩かせたまふ。
嗚呼 立川先生が今は亡し、

その姿 王者の如く、
その声は銀鈴に似たる、
たくましかりき、その日のごとく、
この後も われらを以率て
導きたまへ、とこ永久に。